

源氏物語

初音卷

与謝野晶子訳



源氏物語

初音

紫式部

與謝野晶子訳

若やかにうぐひすぞ啼^なく初春の衣^{きぬ}くば
られし一人のやうに
(晶子)

新春第一日の空の完全にうらかな光のもとには、どんな家の庭にも雪間の草が緑のけはいを示すし、春らしい霞^{かすみ}の中では、芽を含んだ木の枝が生氣を見せて煙っているし、それに引かれて人の心ものびや

かになつていく。まして玉を敷いたと言つてよい六条院の庭の初春のながめには格別なおもしろさがあつた。常に増してみがき渡された各夫人たちの住居^{すまい}を写すことに筆者は言葉の乏しさを感じる。春の女王^{によおう}の住居はとりわけすぐれていた。梅花の香も御簾^{かおり}の中の薰物^{たきもの}の香と紛らわしく漂つていて、現世の極樂がここであるような気がした。さすがにゆったりと住みなしているのであつた。女房たちも若いきれいな人たちは姫君付きに分けられて、少しそれより年の多い者ばかりが紫の女王^{によおう}のそばにいた。上品な重味のあるふうをして、あちらこちらに一団を作つてゐるこうした女房らは齒固^{はがた}めの祝儀などを仲間どうしでしていた。鏡餅^{かがみもち}なども取り寄せて、今年じゅうの幸福を祈るのに興じて合つてゐる所へ主人の源氏がちよつと顔を見せた。懷中手^{ふところで}をしていた

者が急に居ずまいを直したりしてきまりを悪がった。

「たいへんな御祝儀なのだね、皆それぞれ違ったことの上に祝福あれと祈っているのだろうね。少し私に内容を洩らもしてくれないか、私も祝詞を述べるよ」

と微笑ほほえんで言う源氏の美しい顔を見ることが今年ことしの春の最初の幸福であるとなんは思っている。

中将の君が言う。

「御主人様がたを鏡のお餅にも祝っております。自身たちについての祈りなどをいたすものでございせん」

朝の間は参賀の人が多くて騒あいさつがしく時がたったが、夕方前になって、源氏が他の夫人たちへ年始の挨拶を言いに出かけようとして、念

入りに身なりを整え化粧をしたのを見ることは実際これが幸福でなくて何であろうと思われた。

「今朝皆が鏡餅の祝詞を言い合っているのを見てうらやましかった。

奥さんには私が祝いを言っ**て**あげよう」

少し戯れも混ぜて源氏は夫人の幸福を祝った。

うす氷解けぬる池の鏡には世にたぐひなき影ぞ並べる

これほど真実なことはない。二人は世に珍しい麗質の夫婦である。

曇りなき池の鏡によろづ代をすむべき影ぞしるく見えける

と夫人は言った。どの場合、何の言葉にもこの二人は長く変わらぬ愛を誓い合うのであった。

ちょうど元日が子の日ねにあたっていたのである。千年の春を祝うのにふさわしい日である。姫君のいる座敷のほうへ行ってみると、童女や下仕えの女が前の山の小松を抜いて遊んでいた。そうした若い女たちは新春の喜びに満ち足らったふうであった。北の御殿からいろいろときれいな体裁に作られた菓子ひげかごの髭籠と、料理の破子わりご詰めなどがここへ贈られて来た。よい形をした五葉の枝に作り物の鶯うぐいすが止まらせてあつて、それに手紙が付けられてある。

年月をまつに引かれて経ふる人に今日けふ鶯はつねの初音聞かせよ

「音せぬ里の」（今日だにも初音聞かせよ鶯の音せぬ里は住むかひもなし）と書かれてあるのを読んで、源氏は身にしむように思った。正月ながらもこぼれてくる涙をどうしようもないふうであつた。

「この返事は自分でなさい。きまりが悪いなどと氣どつていてよい相手でない」

源氏はこう言いながら、硯すずりの世話などをやきながら姫君に書かせていた。かわいい姿で、毎日見ている人さえだれも見飽かぬ氣のするこの人を、別れた日から今日まで見せてやっていないことは、眞実の母親に罪作りのことであると源氏は心苦しく思った。

引き分かれ年は経ふれども鶯の巢立ちし松の根を忘れめや

少女の作でありのままに過ぎた歌である。

夏の夫人の住居は時候違すまいいのせいか非常に静かであつた。わざと風流がった所もなく、品よく、貴女きじよの家らしく住んでいた。源氏と夫人の二人の仲にはもう少しの隔てというものもなくなつて、徹底した友情というものを持ち合つていた。現在では肉体の愛を超越した夫婦であつた。しかも精神的には永久に離れまいと誓い合う愛人どうしである。几帳きちようを隔はてて花散里はなちるさとはすわつていたが、源氏がそれを手で押しやると、また花散里はそうするままになつていた。お納戸色という物は人をはなやかに見せないものであるが、その上この人は髪のごあいなどももう盛りを通り過ぎた人になつていた。優美な物ではないが添え毛でもすればよいかもしれぬ。

「私のような男でなかったら愛をさましてしまいかもしれない衰退期の顔を、化粧でどうしようとしてもしないほど私の心が信じられているのがうれしい。あなたが軽率な女で、ひがみを起こして別れて行ったりしては、私にこの満足は与えてもらえなかったでしょう」

源氏は花散里に逢うあごとによくこんなことを言った。永久に変わっていかない自身の愛と、この女の持つ信頼は理想的なものであるとさえ源氏は思っていた。親しい調子でしばらく話していたあとで、西の対のほうへ源氏は行つた。

玉鬘がここへ住んでまだ日の浅いにもかかわらず西の対の空気はたまかづらしつくりと落ち着いたものになっていた。美しい童女にいい好みの服装をさせたのや、若い女房などがおおぜいいて、室内の設備などはか

なり行き届いてできてはいるが、まだ十分にあるべき調度が調っているのではなくてもとにかく感じよく取りなされてあった。玉鬘自身もはなやかな麗人であると、見た目はすぐに感じるような、あのきわだった山吹の色の細長が似合う顔と源氏の見立てたとおりの派手な美人は、暗い陰影というものは、どこからも見いだせない輝かしい容姿を持っていた。苦勞をしてきた間に少し少なくなった髪が、肩の下のほうでやや細くなりさらさらと分かれて着物の上にかかっているのも、かえってあざやかな清さの感ぜられることであつた。今はこうして自分の庇護のもとに置くがあぶないことであつたと以前のことを深く思う源氏は、この人を情人にまでせずにはおかれないのでなからうか。肉親のようにまでなつて暮らしていながらもまだ源氏は物足りな

い気のすることを、自身ながらも奇怪に思われて、表面にこの感情を現わすまいと抑制していた。

「私はもうずっと前からあなたがこの家の人であったような気がして満足していますが、あなたも遠慮などはしないで、私のいるほうなどにも出ていらつしやい。琴を習い始めた女の子などもありますから、その稽古けいこを見ておやりなさい。気を置かねばならぬような曲がった性格の人などはあちらにいませんよ。私の妻などがそうですよ」

と源氏が言うのと、

「仰せどおりにいたします」

と玉鬘たまかざらは言っていた。もつともなことである。

日の暮れ方に源氏は明石あかしの住居すまいへ行つた。居間に近い渡殿わたどのの戸をあ

けた時から、もう御簾みすの中の薰香たきもののにおいが立ち迷めっていて、気高けだかい
艶えんな世界へ踏み入る気がした。居間に明石の姿は見えなかった。どこ
へ行つたのかと源氏は見まわしているうちに硯すずりのあたりにいろいろな
本などが出ているのに目がついた。支那しなの東京錦とんきにしきの重々ふちしい縁を取つ
た褥しとねの上には、よい琴が出ていて、雅味のある火鉢ひばちに侍従香えびこがくゆら
してある。その香の高い中へ、衣服にたきしめる衣被香えびかうも混じつて薰
るのが感じよく思われた。そのあたりへ散つた紙に手習い風の無駄書むだ
きのしてある字も特色のある上手じょうずな字である。くずした漢字をたくさ
んには混ぜずに感じよく書かれてあるのであった。姫君から来た鶯うぐいすの
歌の返事に興奮して、身にしむ古歌などが幾つも書かれてある中に、
自作もあつた。

珍しや花のねぐらに木づたひて谷の古巢をとへる鶯

やつと聞き得た鶯の声というように悲しんで書いた横にはまた「梅の花咲ける岡辺をかべに家しあれば乏しくもあらず鶯の声」と書いて、みずから慰めても書かれてある。源氏はこの手習い紙をながめながら微笑ほほえんでいた。書いた人はきまりの悪い話である。筆に墨をつけて、源氏もその横へ何かを書きすさんでいる時に明石は膝いざ行り出た。思い上がった女性ではあるが、さすがに源氏に主君としての礼を取る態度が謙遜けんそんであつた。この聡明そうめいさは明石の魅力でもあつた。白い服へ鮮明に掛すそかつた黒髪くろかみの裾が少し薄くなつて、きれいに分かれた筋を作つているのもかえつてなまめかしい。源氏は心が惹ひかれて、新春の第一夜を

ここに泊まることは紫夫人を腹だたせることになるかもしれないながら、そのまま寝てしまった。六条院の他の夫人の所ではこの現象は明石夫人がいかにも深く愛されているかを思わせるものであると言っていた。まして南の御殿の人々はくやしがつた。

源氏はまだようやくあけぼの曙ぐらいの時刻に南御殿へ帰った。こんな早く出て行かないでもいいはずであるのにと、明石はそのあとでやはり物思わしい気がした。紫の女王はまして、失敬なことであると、不快に思っているはずの心がらを察して、

「ちよつとうたた寝をして、若い者のようによく寝入ってしまった私を、迎えにもよこしてくれませんでしたね」

こんなふうにも言つてきげん機嫌を取っているのもおもしろく思われた。

打ち解けた返辞のしてもらえない源氏は困ったままで、そのまま寝入ったふうを作ったが、朝はずっと遅く^{おそ}なつて起きた。正月の二日は臨時の饗宴^{きようえん}を催すことになつていたために、忙しいふうをして源氏はきまり悪さを紛らせていた。親王がたも高官たちもほとんど皆六条院の新年宴会に出席した。音楽の遊びがあつて贈り物に纏頭^{てんとう}に六条院のみよくする華奢^{かしや}が見えた。多数の縉紳^{しんしん}は皆きらびやかに風采^{ふうさい}を作っているが、源氏に準じて見えるほどの人もないのであつた。個別的に見ればりっぱな人の多い時ではあるが、源氏の前では光彩を失つてしまふのが氣の毒である。つまらぬ下僕^{しもべ}なども主人に従つて六条院へ来る時には、服装も身の取りなしをも晴れがましく思うのであつたから、まして年若な高官たちは妙齡の姫君が新たに加わつた六条院の参

座には夢中になるほど容姿を気にして来て、平年と違つた光景が現出された新春であつた。春の花を誘う夕風がのどかに吹いていた。前の庭の梅が少し咲きそめたこの黄昏時に、たそがれ楽音がおもしろく起こつて来た。「この殿」が最初に歌われて、はなやかな気分がまず作られたのである。源氏も時々声を添えた。さきぐさ福草の三つ葉四つ葉にというあたりがことにおもしろく聞かれた。どんなことにも源氏の片影が加わればそのものが光づけられるのである。こうしたはなやかな遊びもはで派手な人出入りの物音も遠く離れた所で聞いている紫の女王によおう以外の夫人たちは、極楽世界に生まれても下品下生のげほんげしょう仏で、まだ開かない蓮のはす蕾のつぼみ中にこもっている気がされた。まして離れた東の院にいる人たちは、年月に添えて退屈さと寂しさが加わるのであるが、うるさい世の中と隔

離れた山里に住んでいる気になっていて、源氏の冷淡さをとがめたり恨んだりする気にもなれなかった。物質的の心配はいつさいなかったから、仏勤めをする人は専念に信仰の道に進めるし、文学好きな人はまたその勉強がよくできた。住居^{すまい}なども個人個人の趣味と生活にかなった様式に作られてあつた。

新年騒ぎの少し静まつたころになつて源氏は東の院へ来た。末摘花^{すえつむはな}の女王^{によおう}は無視しがたい身分を思つて、形式的には非常に尊貴な夫人としてよく取り扱っているのである。昔たくさんあつた髪も、年々に少なくなつて、しかも今は白い筋の多く混じつたこの人を、面と向かつて見る事が堪えられず気の毒で、源氏はそれをしなかった。柳の色は女が着て感じのよいものでないと思われたが、それはここだけのこ

とで、着手が悪いからである。陰気な黒ずんだ赤の搔練かいねりの糊氣のりけの強い一かさねの上に、贈られた柳の織物の小袷こうちぎを着ているのが寒そうで氣の毒であつた。重ねに仕立てさせる服地も贈られたのであるがどうしたのであらう。鼻の色だけは春の霞かすみにもこれは紛れてしまわないだらうと思われるほどの赤いを見て、源氏は思わず歎息たんそくをした。手はわざわざ几帳きちようの切れを丁寧に重ね直した。かえつて末摘花は恥ずかしがつていないのである。こうして変わらぬ愛をかける源氏に真心から信賴している様子に同情がされた。こんなことにも常識の不足した点のあるのを、哀れな人であると思つて、自分だけでもこの人を愛してやらねばというふうに考えるとところに源氏の善良さがうかがえるのである。話す声なども寒そうに慄ふるえていた。

源氏は見かねて言った。

「あなたの着物のことなどをお世話する者がありますか。こんなふう
に気楽に暮らしていてよい人というものは、外見はどうでも、何枚で
も着物を着重ねているのがいいのですよ。表面だけの体裁よさを作っ
ているのはつまりませんよ」

女王はさすがにおかしそうに笑った。

「醍醐^{だいご}の阿闍梨^{あじやり}さんの世話に手がかかりましてね、仕立て物が間に合
いませんでした上に、毛皮なども借りられてしましまして寒いのです
よ」

と説明する阿闍梨というのは鼻の非常に赤い兄の僧のことである。
あまりに見栄を知らない女であると思いつながらも、ここではまじめな

一面だけを見せている源氏はなおも注意をする。

「毛皮はお坊様にあげたほうが適当でいいのですよ、そんな物より、白い着物という物は何枚でも重ねて着ていいのですからね。なぜあなたはそうしないのですか。入り用な物も送ってよこすのを私が忘れていれば、遠慮なく言つてよこしてください。もとからぼんやりとした私はまた怠け者なまでもあるし、ほかの方たちのこととこんがらがってしまふこともあつて、済まない結果にもなるのですよ」

と言つて源氏は、隣の二条院のほうの蔵くらをあけさせ、絹や綾あやを多く紅くれなゐの女王に贈つた。荒れた所もないが、男主人の平生住んでいない家は、どこことなく寂しい空気のたまっている気がした。前の庭の木立だけは春らしく見えて、咲いた紅梅なども賞翫しょうがんする人のないのをなが

めて、

ふるさとの春の木末にたづねきて世の常ならぬ花を見るかな

と源氏は独言^{ひとりごと}したが、鼻の赤い夫人は何のこととも気づかなかつたであらう。

空蟬^{うつせみ}の尼君の住んでいる所へ源氏は来た。その主人^{あるじ}らしくここは住まずに、目だたぬ一室にいて、住居^{すまい}の大部分を仏間に取った空蟬が仏勤めに傾倒して暮らす様子も哀れに見えた。経巻の作りよう、仏像の飾り、ちよつとした閑伽^{あか}の器具などにも空蟬のよい趣味が見えてなつかしかった。青鈍色^{あおにび}の几帳^{きちよう}の感じのよい蔭^{かげ}にすわっている尼君の袖^{そで}

口の色だけにはほかの淡い色彩も混じっていた。源氏は涙ぐんでいた。

「松が浦島うらしま（松が浦島今日けふぞ見るうべ心あるあまも住みけり）だと思つて神聖視するのにとどめておかねばならないあなたなのです。昔から何という悲しい二人でしょう。しかしこうして逢あつてお話しするくらいのことは永久にできるだけの因縁があるのですね」

などと言つた。空蟬の尼君も物哀れな様子で、

「ただ今こんなふうに御信頼して暮らさせていただきますことで、私は前生に御縁の深かつたことを思っております」

と言う。

「あなたを虐しいたげた過去の追憶に苦しんで、おりおり今でも仏にお詫わび

を言わねばならないのが私です。しかしおわかりになりましたか、ほかの男は私のように純なものではないということを、あなたはそれからの経験でお知りになっただろうと思う」

継息子ままむすこのよこしまな恋に苦しめられたことを、源氏は聞いていたものであろうと女は恥ずかしく思った。

「こんなにみじめになりました晩年をお見せしておりますことで、過去の罪も清算されるはずでございます。これ以上の報いがどこにございましょう」

と言って、空蟬うつせみは泣いてしまった。昔よりも深味のできた品のよい所が見え、過去の恋人で現在の尼君として別世界のものに扱うだけでは満足のできかねる気も源氏はしたが、恋の戯れを言いかける相手

ではなかった。いろいろな話をしながらも、せめてこれだけの頭のよさがあの人であればよいのにと末摘花の住居すまいのほうがながめられた。こんなふうで源氏の保護を受けている女は多かつた。だれの所もも洩もらさず訪問して、

「長く来られない時もありますが、心のうちでは忘れているのではないのです。ただ生死の別れだけが私たちを引き離すものだと思います
が、その命というものを考えると、実に心細くなりますよ」

などとなつかしい調子で恋人たちを慰めていた。皆ほどほどに源氏は愛していた。女に対して驕慢きょうまんな心にもついなりそうな境遇にいる源氏ではあるが、末々の恋人にまで誠意を忘れず持つてくれることに、それらの人々は慰められて年月を送っていた。

今年ことしの正月には男踏歌おとことうかがあつた。御所からすぐに朱雀院すざくへ行つてそ

の次に六条院へ舞い手はまわつて来た。道のりが遠くてそれは夜の明け方になつた。月が明るくさして薄雪の積んだ六条院の美しい庭で行なわれる踏歌がおもしろかつた。舞や音楽じやうずの上手な若い役人の多いころで、笛なども巧みに吹かれた。ことにここのできばえを皆晴れがましく思っているのである。他の二夫人らにも来て見物することを源氏が勧めてあつたので、南の御殿の左右の対や渡殿わたどのを席に借りて皆来ていた。東の住居すまいの西の対の玉鬘たまかづらの姫君は南の寝殿に来て、こちらの姫君に面会した。紫夫人も同じ所きちようにいて几帳きちようだけを隔てて玉鬘と話した。踏歌の組は朱雀院すざくで皇太后の宮のほうへ行つても一回舞つて来たのであつたから、時間がおそくなり、夜も明けてゆくので、饗応きやうおうなど

は簡単に済ますのではないかと思っていたが、普通以上の歓待を六条院では受けることになった。光の強い一月の暁の月夜に雪は次第に降り積んでいった。松風が高い所から吹きおろしてきてすさまじい感じにももう一歩でなりそうな庭にもう折り目もなくなった青色の上着に白しろが襲さねを下にしただけの服装に、見ばえない綿を頭にかぶっている舞い手が出ているだけのことも、所がらかおもしろくて、命も延びるほどに観衆は思った。源氏の子息の中將と内大臣の公子たちが舞い手の中ではことにはなやかに見えた。ほのぼのと東の空が白んでゆく光に、やや大降りに降る雪の影が見えて寒い中で、「竹川」を歌って、右に寄り、左に集まって行く舞い手の姿、若々しいその歌声などは、絵にかいて残すことのできないのが遺憾である。各夫人の見物席には、い

ずれ劣らぬ美しい色を重ねた女房の袖口そでぐちが出ていて、曙あけぼのの空に春の花の錦にしきを霞かすみが長く一段だけ見せているようで、これがまた見ものであった。舞い人は、「高巾子こうこし」という脱俗的な曲を演じたり、自由な寿詞じゅしに滑稽味こっけいみを取り混ぜたりもして、音楽、舞曲としてはたいして価値のないことで役を済ませて、慣例の纏頭てんとうである綿を一袋ずつ頭にいただいて帰った。夜がすっかり明けたので、二夫人らは南御殿を去った。源氏はそれからしばらく寝て八時ごろに起きた。

「中将の声は弁べんの少将の美音にもあまり劣らなかつたようだ、今は不思議に優秀な若者の多い時代なのですね。昔は学問その他の堅実な方面にすぐれた人が多かつたろうが、芸術的のことでは近代の人の敵ではないらしく思われる。私は中将などをまじめな役人に仕上げようと

する教育方針を取っていて、私自身のまじめでありえなかった名誉を回復させたく思っていたが、やはりそれだけでは完全な人間に成りえないのだから、芸術的な所をなくさせぬようにしなければならないのだと知った。どんな欲望も抑制したまじめ顔がその人の全部であってはいやなものですよ」

などと源氏は夫人に言つて、息子をかわいく思うふうが見えた。万^{ばん}春^{しゅん}楽^{がく}を口ずさみにしていた源氏は、

「奥さんがたがはじめてこちらへ来た記念に、もう一度集まってもらつて、音楽の合奏をして遊びたい気がする。私の家^{うち}だけの後^ご宴^{えん}があるべきだ」

と言つて、秘蔵の楽器をそれぞれ袋から出して塵^{ちり}を払わせたり、ゆ

るんだ絃げんを締めさせたりなどしていた。夫人たちはそのことをどんなに晴れがましく思ったことであろう。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
